2018年10月10日 本紙 特集 011頁　　(C)神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

現代詩

講評

地球ができる壮大な物語。なぜかと繰り返し問いかけながら、「脈打つリズム」や「無限」を自然の残酷さとともに受けいれようとする生命感が感じられます。題材は大味ですが、若い感性が光りました。　（審査員・中島　悦子）

巣立ちの場所

天下　泰平　作

てんか・たいへい　本名・臼井泰平（うすい・たいら）2001年生まれ。県立麻生高校2年。川崎市麻生区

初めはすべてが無だったはずなのに
この星ができてから
あとからあとから産声をあげた
小さく弱かった初めの命は
長い年月をかけて陸に上がり
世界にあふれるまでになった
なぜなのか
脈打つリズムに母性があるのは
なぜなのか
どこまでもつづく広さに無限を感じるのは
なぜなのか
暗く深い沈黙の底にも生命が紡がれているのは
なぜなのか
変わりゆくときの流れの中で色とりどりに変化するのは
なぜなのか
静かで穏やかで、人に恵みを与えながらも
時に横暴で荒っぽく、人を殺めることがあるのは
地球ができて、生命が誕生したのは海だった
汗と涙がしょっぱいのは我々の祖先が海に棲んでいたから
今も生命の営みはつづいている
脈々と受け継がれていく
青いゆりかごの中で

第48回

神奈川新聞

文芸コンクール　佳作②

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。佳作作品は順次掲載します。

次回は11日の予定

短編小説

講評

「夢綺譚　星博士　風の峡谷唄」には、この人にしか書けない強烈な個性が漂っている。コンテストを意識していない頑固さにも惹かれた。私が選考委員でなければ漏れた作品だろうが、そのオリジナリティーは敬服に価する。　（審査員・伊東　潤）

夢綺譚　星博士　風の峡谷唄

寺尾　央　作

てらお・ひさし　1944年生まれ。無職。横浜市磯子区

奇妙な夢を見た。夜の天空から放される威光があった。夢は太古の大昔のようである。辺り構わず衆為す群を束ねる王があった。王は死して後も尚、威光を放ち、その群に畏れを留めるのだった。天空をも支配しようとした。

夜空を燦ざめく綺羅星の幾つかを線で結び大きく浮かび出る星座のひときわ壮麗な煌きを放つ星こそ亡き王の化身と群に固く信じさせた。王は死して星王となる。その煌きには、どこかに突き刺すほどの蒼冷な光線も混在している。その周辺には王の死に殉じて自刃する王妃や王家縁者の者、重鎮の者やらを配座する星をも定められた。王家ではこれを星宿座位図と云っている。天空はかく極められかく耀く。編れた星宿座位図を星王が支配する。

今の王だけが祭祀をして秘かに星王の霊と交信した。時空路を想定し往来する。星夜に向かう階段も高木を順に高くして支柱としている。王は交信し農耕の吉凶を星王に占い、暦を作るのだった。霊宿る暦を作る。

星宿座位図を極める専門の者が王家にはいた。幾人かの星博士である。壮大な星夜へのアニミズムに生きているのだった。

星博士らの星探しは、常に心の内にある。王死して後に、初めて心の扉を開いた。紙などへの図録は禁じられている。発覚すると斬首される程の厳しい掟があった。

星探しは五色の糸を巻いた星筒によって行われる。漆を塗り邪悪な妖星を防ごうとした星博士もあった。その星筒は神聖な太刀にも匹敵する。しかも一子相伝の秘法を蔵した。厳しく伝授される秘法によって星の品格を煌きやら輝きやら発光彩などから把捉するのだった。威光を放つ星である。星博士らは太刀を腰に佩くように星筒を携帯した。ところが、近年新たな星探しは決して容易ではなくなっている。夢に深刻な事態が星博士らを密かに襲っている。

この頃になると群に土豪の者が現れ農耕地を奪い盗る紛争やらその群の内訌やらが勃発し、激しさを増した。それだけではない。地が揺れ動き海流が逆巻いた。或は秋冷の如き長雨が続くかと思えば、旱で草木も群の食料も枯渇する。天地異変が幾度となく辺境の地までも呑みこんだ。狩猟の勇者が変わり果てた姿で帰り着くことも数多あった。疫病が蔓延する。群の多くの死体が野山に棄てられ蛆虫が湧いた。その上を鴉が鳴き叫び舞っている。異様な光景であった。この世の現実は王家でも例外はない。星博士らは一層窮地に追い込まれるのだった。

こうなると満点の星空すら不思議に蔭り、不吉な兆候が夜陰に乗じて忽然と現れた。不気味に尾を引く流星群である。流星群は幾日か続いた。かってのように星評定に饒舌な星博士らは誰もいない。室は重苦しい空気に包まれるのだった。

この星博士らには指揮をとる長老があった。長老は天空の夜空に威光を放つ星王を幾つも定め星宿座位図を極めた。が、今やその悉くが相次ぐ乱世争乱や天地異変、疫病などの果てに使い尽されるのだった。

「危急存亡！吾心底すでに底を突く。払底しても何もなし。星王とその王家の星宿座位図、ついに枯渇せり！星王枯れり！」

と、長老は吐き捨てるように怒鳴った。

「吾、死を決し星探しの道を断つ。星宿座位図は枯渇し、もはやかってない困難極まる局面に差し掛かった。惨憺たる局面に差し掛かった。若き星博士たちよ。星筒を捨てよ。星王に替わる王のとるべき道を求めよ！さもなければ、今に王滅び、群滅ぶ！。」

長老は感情を剥き出しにして若き星博士らを烈しく説諭した。意を決した声である。暁せまる窓越しに天空を睨み鬼気迫る危うさを長老は漂わせた。すると星筒を太刀に持ち替えた。その一瞬であった。白刃を一振りする腕に満身の力を込めて眼球を交互に刺し返した。更に頸に刃先を突き刺したではないか。真赤な血潮が噴き上がった。切羽詰まる星評定の室であった。長老は室床にどっと崩れこんだ。ひくひくと体がわずかに震え長老は息絶えた。

若き星博士らは戦慄した。眼の前に突然起こったおぞましい光景に茫然と立ち竦んでいる。長老は吹き上げる己の血潮で星探しの世の悉くを塗り固め、その室に自らが為して来た星王の支配を封じ込めてしまったようだ。凄まじい気迫が事切れた老星博士の後まで続き、幾日か過ぎても淀み続けている。

夢は太古の大昔、ぼんやりとある居館を映し出している。やがて鮮明になった。

王の居館が石墨を何丈にも積み上げた上に建てられている。石墨は巨岩を切り出し、中を小石で埋めながら弓形に仕上げられた。敵や賊どもが昇ることのできない砦のようでもある。要塞仕立てに居館を構える石工の業は既にあった。

石墨の一箇所に王の居館に繋がる石段が設けられている。急な石段を登ると見張りを兼ねる重厚な門が建てられている。その門番の目がはたと釘付けになった。

「人ちがいではないか。いやたしかにあの者たちだ。」

と、門番は取次の武者に告げた。石段を登って来たのは姿を眩まし続けていたあの星博士らの一行である。

緊張が奔った。縛すべきか。武者はためらったが、星博士の一行に向かって居館の砂利庭を指示した。その者らに莫座することをも許している。正座して待てと促した。

訝う王家は、博士らの集う室を太刀佩く武者に偵察させていた。室壁のあちこちに自刃する長老の夥しい血痕が既にどす黒くなって滲み出ている。誰も寄せ付けぬ生臭い匂いすら立ち込めている。

「誠に危うい！」と、偵察の武者は察知した。星博士らは逃亡したか。他の者に連れ去られたか。その懸念が武者に渦巻いた。この喧騒が王に伝わらぬわけはない。王は激怒した。星博士の全ての者を捜し出し縛せよと逆鱗の命を発した。王は懐の奥に白刃すら潜ませるのだった。しきりに秋虫の羽振う音色が居館の風に乗っている。

王に星博士ら一行がやって来て、今砂利庭に莫座していると告げられた。砂利庭の左右の椅子に重鎮の者が座位し、しばらくして奥の間に王が玉座した。辺りの気配が一気に緊迫した。慇懃に星博士の長老が王への慶祝を述べた。その直後であった。いきなり王は直言に及んだ。

「あまたして、何を企み、何をしに星の室を空け、身を晦まし続け、今現れるとは何事だ。汝らの犯した罪は重い！」

井上　あきむ　画

王は怒りに震える胸の内を極力沈め、星博士らに問い正すのだった。長老は毅然と対峙した。

「吾らの負った宿命は常に秘めること也。今回、いささか長き春秋とは申せ、秘して旅路にあった。今初めて、吾が王の前に進み出て秘め事を明かす者也。」

次第に感情が昂揚した。それが抑揚となり、叙事旋律の得体知れぬ地唄のようになった。が、重鎮らは長老の地唄を制止させようとはしなかった。ただ、王の白刃が振り降ろされるか否かは誰も知れない。王は身を乗り出した。眼力で先を続けろと命じた。長老の地唄はやがて核心を突いた。

「累代を重ね、更に乱闘やら天地異変やらを重ね、今や星王の星座は夜の天空に充ち溢れたり。既に新しき星座を定める余地はなし。これが難問を如何にして自らに諮るか。帰結するところは唯一つ。星探しを断つ！その決意也。吾ら死を賭して決意せり。先の長老は自刃してまでも決意せり。浅しと云えども吾ら知見を寄せ集め、星宿座位図に替る新しき在り方を求め彷徨い、長い旅路にあった。されば、吾ら星探しの罪を犯し罰を喰らおうとも星王を無くし、今を治める王こそ守る！と心せり！」

星博士らは誰云うこともなく一斉に腰に佩く、細工鮮やかな、あの星筒をさっと抜き取り座する目の前にぴしりと置いた。一糸乱れぬ意思表示であった。王は何も云わず次を唄せよと鋭い視線をまたしても長老に送った。

「吾らには胸の星絵巻は既にない。されば亡き王の御霊に額ずき亡き王の御霊を祀るべき墳墓の世の到来を想い描く也。これに適する処在りやなしやと生い茂る野山に山刀を振り振り分け入れり。深き奥地に分け入れり。陽光の地上に降り注ぎ為す処遂に吾らは行き当たる。この地を風の峡谷と呼ぶ。深山とその森に囲まれた峡谷在り。汪溢する渓流は数多の魚種を貯え、鳥獣を育み、ついには大海原に達する。海に舟を漕ぎ出し漁する屈強な若者が賑わう。そこ吹く風は四季を移ろい、山麓を肥沃な農耕地に化す。牛馬放牧を叶う。家族為す郷は豊に居を構えて久しい。峡谷の近く熱水が湧きいずる処在り。火の燃える水溜まる処在り。郷民は墓標に向い四方道往来を為す。牛馬を肥やしはそれを役する。まほらにこの地をおしなべて治め、王の墳墓為す処と定めること叶わぬかと見極めたり。しきなべて墳墓に眠る王の御霊には、はや天空の時空路を昇らずして馬を蹴りてすぐさまに交わる事叶うべし。その世来たれば王家を始め亡き王に殉じ自刃することもなし。いかなる時でも事あらば急ぎ亡き王の御霊に額ずき暴う地続きの霊路叶いたり。」

重鎮たちに微かな響動が起こった。かねがね重鎮たちの胸中には暗く沈む時世の閉塞感が漂っている。もしや、この学室の者の話が誠の事なればとの思いが奔った。墳墓造成を彼の地で果たすとしたら今まで見たこともない新しき郷が出現する。その想いが脹んだ。長老は最後に次ぎのように唄い綴った。

「すでに天空のものなる星宿座位図の治世は過ぎ去った。石工を束ね巨を成す石墨を積み墳墓の造成こそ肝要とここにかしこみ謹上する者也。吾が王は現実の陽光出ずる墳墓の大地に根を張るべし。その地より強靭な新しき郷の治世を創つべし。王と王家の星宿座位図を消滅させたる罪は吾らにこそある。死で罪を贖い、太刀振られる露と消えようとも、墳墓の新しき世の郷造り為すことを切に祈り奉じる者也！」

他の星博士らの嗚咽する涙が留めどなく蓐座する上を濡らしている。秋のつるべ落としの陽光だけが王の居館を黄色みを帯びて紅く照らし出している。処罰は直ちにあるのか。王の裁断ひとつにあった。残照の光が莫蓐の上までも長々と迫り落ち込んだ。居館の屋根に垂れ込んだ紅葉が細い枝先まで朱に染まり、朱葉は残光に透いて微妙な影を深々と重ねている。まもなく斬首の鮮血で更に染まる。重鎮たちは太刀柄に手をやり王の断罪宣治を待った。沈黙し続けた王はついに宣治を発した。

「星博士の長老よ！長老に従う天空の知恵者どもよ！我は今霊の飛び交うを幾つも観た。我の心眼は亡き王の霊魂をも映し出した。我は深々と頭を下げ天空を支配する我星王たちに問うた。星博士らの為すは我が王家の行く末に弓引くことかと。今は亡き先の王は否！と鮮烈に我に伝えた。他の星王も同意なるかと再び問うた。先の王は大きく頷くと、我から消えた。星博士の棟梁よ！我は言霊をして宣治する。我はやがて陽光出ずる王と為る！されば、星博士どもよ！汝らの天職悉く解く。これより先、我と王家から去れ！去って汝らが見つけて告げる風の峡谷なる地に奔りまいらせ住まい為せ。我と我が王家もやがて風の峡谷より新しき治世を創つ！」

そう宣治すると王は玉座からすっと佇立した。隠し持つ白刃がすばやく鞘に収められる音すらした。王は玉座を後にした。

朱に透く紅葉の残光が、ひときわ耀きを増し錦色に変わって映えた。星博士の長老と星博士らは王家重鎮の者に儀して礼を尽し莫蓐をたたみ、その場を立った。あの星筒をしかと手に握りしめていたが、再び腰に佩くことはなかった。星博士らの先祖を越える人生の長い旅路が遂に終わった。

篝火が焚かれ門扉が重々しい音を立てて開かれた。石墨の石段の下はすでに夕闇が迫って見える。が、頑丈な門扉を凝視する者たちの視線が幾つもあった。星博士らの家族である。父、母もあれば祖父、祖母もあった。ましてや妻は童子の肩をしっかり抱きしめ石墨の石段に眼を凝らしている。門扉が大きく開かれ、ぼんやりとして篝火の明かりがこぼれ堕ちた。見上げる家族は息を呑んだ。星博士らの悉くが屍となって運び出されるのではないかと案じた。

が、またたくまに歓声が起こった。歓喜に変わった。長老を先頭に粛々とした脚どりで門扉を潜る星博士らの列が現れた。潜り終えると王の居館に向かって深々と禮する星博士らであった。

石段を下る星博士らの脚は早かった。待ち焦がれた家族の中にいっきに駆け込んだ。後は石段の上の門扉が固く閉められ、篝火の明かりすらなくなっている。夕闇に包まれる路上では星博士らの家族がしっかりと抱き合っている。温もり続く路であった。満天の星空に流れ星が幾筋か奔り、遠く彼方に消え去っていった。その後、この星博士らとその家族の姿容を見た者は誰もない。夢にもがくも見つからない。

かくして夢に巨大墳墓の治世が始まった。その郷造りも波及した。が埴輪にすら星筒を翳す星博士らの姿容は現れない。ずっと後の世には大海を越えて陶人が渡来し薨を焼き大門のある都も生まれた。その大門の屋根の左右に鵄尾を跳ねあげた魚金星が現れた。が、あの星博士らの痕跡はどこにもない。伝わるのは風の峡谷跡の如き地唄だけである。夢の中で太古の大昔、風の峡谷唄が地を這い下り迫ってくる。不気味な気配だが、時代は辺り構わず衆為す群から少しずつ家族為す故郷の世に近づいているらしい。やがて雲龍が嶮峻な山を包み、連なる翌巒を隠し、汪溢する峡谷の流れまでも鵜呑みして夢は終わった。

はてさて奇妙な夢を見た。夢が覚めても残像が残り続けている。

（完）